

やまなし

宮
沢
賢
治

や
ま
な
し

宮
沢
賢
治

小さな谷川の底を写した二枚の青い幻燈です。

五月

一疋^{ひき}の蟹^{かに}の子供らが青じろい水の底で話てみました。

『クラムボン^{ひき}はわらつたよ。』

『クラムボンはかぶかぶわらつたよ。』

『クラムボンは跳てわらつたよ。』

『クラムボンはかぶかぶわらつたよ。』

上の方や横の方は、青くくらく鋼のやうに見えます。そのなめらかな天井を、つぶつぶ暗い泡が流れて行きます。

『クラムボンはわらつてみたよ。』

『クラムボンはかぶかぶわらつたよ。』

『それならなぜクラムボンはわらつたの。』

『知らない。』

つぶつぶ泡が流れて行きます。蟹の子供らもぼつぼつとつづけて五六粒泡を吐きました。それはゆれながら水銀のやうに光つて斜めに上の方へのぼつて行きました。

つうと銀のいろの腹をひるがへして、一疋^{ひき}の魚が頭の上を過ぎて行きました。

『クラムボンは死んだよ。』

『クラムボンは殺されたよ。』

『クラムボンは死んでしまつたよ……。』

『殺されたよ。』

『それならなぜ殺された。』兄さんの蟹は、その右側の四本の脚の中の二本を、弟の平べつたい頭にのせながら云ひました。

『わからない。』

魚がまたツウと戻つて下流の方へ行きました。

『クラムボンはわらつたよ。』

『わらつた。』

にはかにバツと明るくなり、日光の黄金は夢のやうに水の中に降つて来ました。

波から来る光の網が、底の白い磐の上で美しくゆらゆらのびたりちぐんだりしました。泡や小さなごみからはまつすぐな影の棒が、斜めに水の中に並んで立ちました。

魚がこんどはそこら中の黄金の光をまるつきりくちやくちやにしておまけに自分は鉄いろに変に底ばかりして、又上流の方へのぼりました。

『お魚はなぜあゝ行つたり来たりするの。』

弟の蟹がまぶしさうに眼を動かしながらたづねました。

『何か悪いことをしてるんだよとつてるんだよ。』

『とつてるの。』

『うん。』

そのお魚がまた上流^{かみ}から戻つて来ました。今度はゆつくり落ちついて、ひれも尾も動かさずたゞ水にだけ流されながらお口を環^わのやうに円くしてやつて来ました。その影は黒くしづかに底の光の網の上をすべりました。

『お魚は……。』

その時です。俄^{にわか}に天井に白い泡がたつて、青びかりのまるでぎらぎらする鉄砲弾^{だま}のやうなものが、いきなり飛込んで来ました。

兄さんの蟹ははつきりとその青いもののさががコンパスのやうに黒く尖^{とが}つてゐるのも見ました。と思ふうちに、魚の白い腹がぎらつと光つて一ぺんひるがへり、上の方へのぼつたやうでしたが、それつきりもう青いものも魚のかたちも見えず光の黄金^{きん}の網はゆらゆらゆれ、泡はつぶつぶ流れました。

二足はまるで声も出ず居すくまつてしまいました。

お父さんの蟹^{かに}が出て来ました。

『どうしたい。ぶるぶるふるへてゐるぢやないか。』

『お父さん、いまをかしなものが来たよ。』

『どんなもんだ。』

『青くてね、光るんだよ。はじがこんなに黒く尖つてるの。それが来たらお魚が上へのぼつて行つたよ。』
『そいつの眼が赤かつたかい。』

『わからない。』

『ふうん。しかし、そいつは鳥だよ。かはせみと云ふんだ。大丈夫だ、安心しろ。おれたちはかまはないんだから。』

『お父さん、お魚はどこへ行つたの。』

『魚かい。魚はこはい所へ行つた』

『こはいよ、お父さん。』

『いゝいゝ、大丈夫だ。心配するな。そら、樺の花が流れて来た。ごらん、きれいだらう。』

泡と一緒に、白い樺の花びらが天井をたくさんすべつて来ました。

『こはいよ、お父さん。』弟の蟹も云ひました。

光の網はゆらゆら、のびたりちぐんだり、花びらの影はしづかに砂をすべりました。

十二月

蟹の子供らはもうよほど大きくなり、底の景色も夏から秋の間にすっかり変わりました。

白い柔かな円石もころがって来小さな錐の形の水晶の粒や、金雲母のかけらもながれて来てとまりました。

そのつめたい水の底まで、ラムネの瓶の月光がいつぱいに透とほり天井では波が青じろい火を、燃したり消したりしてゐるやう、あたりはしんとして、たゞいかにも遠くからといふやうに、その波の

音がひびいて来るだけです。

蟹の子供らは、あんまり月が明るく水がきれいなので睡^{ねむ}らないで外に出て、しばらくだまつて泡をはいて天井の方を見てゐました。

『やつぱり僕の泡は大きいね。』

『兄さん、わざと大きく吐いてるんだい。僕だつてわざとならもつと大きく吐けるよ。』

『吐いてごらん。おや、たつたそれきりだらう。いゝかい、兄さんが吐くから見ておいで。そら、ね、大きいだらう。』

『大きないや、おんなじだい。』

『近くだから自分のが大きく見えるんだよ。そんなら一緒に吐いてみよう。いゝかい、そら。』

『やつぱり僕の方大きいよ。』

『本当かい。ぢや、も一つはくよ。』

『だめだい、そんなにのびあがつては。』

またお父さんの蟹が出て来ました。

『もうねろねろ。遅いぞ、あしたイサドへ連れて行かんぞ。』

『お父さん、僕たちの泡どつち大きいの』

『それは兄さんの方だらう』

『さうぢやないよ、僕の方大きいんだよ』弟の蟹は泣きさうになりました。

そのとき、トブン。

黒い円い大きなものが、天井から落ちてずうつとしづんで又上へのぼつて行きました。キラキラツと黄金きんのぶちがひかりました。

『かはせみだ』子供らの蟹かには頸くびをすくめて云ひました。

お父さんの蟹は、遠めがねのやうな両方の眼をあらん限り延ばして、よくよく見てから云ひました。
『さうぢやない、あれはやまなしだ、流れて行くぞ、ついて行つて見よう、あゝいゝ匂におひだな』

なるほど、そこらの月あかりの水の中は、やまなしのいい匂ひでいっぱいでした。

三足びきはぽかぽか流れて行くやまなしのあとを追ひました。

その横あるきと、底の黒い三つの影法師が、合せて六つ踊るやうにして、山なしの円い影を追ひました。

間もなく水はサラサラ鳴り、天井の波はいよいよ青い焰ほのほをあげ、やまなしは横になつて木の枝にひつかつてとまり、その上には月光の虹にじがもかもか集まりました。

『どうだ、やつぱりやまなしだよ、よく熟してゐる、いい匂ひだらう。』

『おいしさうだね、お父さん』

『待て待て、もう二日ばかり待つとね、こいつは下へ沈んで来る、それからひとりでおいしいお酒ができるから、さあ、もう帰つて寝よう、おいで』

親子の蟹かには三足自分等の穴に帰つて行きます。

波はいよいよ青じろい焰をゆらゆらとあげました、それは又金剛石の粉をはいてゐるやうでした。

十二月

私の幻燈はこれでおしまひであります



《出典》

底 本…「宮沢賢治全集8」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年1月28日第1刷発行

底本の親本…「新修宮沢賢治全集 第十三巻」筑摩書房

1980（昭和55）年3月

初 出…「岩手毎日新聞」岩手毎日新聞社

1923年（大正12年）4月8日

入 力…石井健児

校 正…高橋美奈子

1998年10月26日公開

2011年2月14日修正

青空文庫作成ファイル…

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫

(<http://www.aozora.gr.jp/>)で作られました。

入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

書 名：やまなし

著 者：宮沢賢治

組版・装丁：あおね

挿 絵：あおね

発 行 日：令和 8 年 7 月 26 日

発 行：個人発刊

※組版サンプルとして発刊しました内容や誤植を
見つけた場合は下記へご連絡いただければ
修正致します。

<https://aonetime.com/>

